神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

La Mère-langue se transforme --les trois générations des femmes chez Assia Djebar et Malika Mokeddem

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1812

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



母―語は変わる
――アシア・ジェバールとマリカ・モカデムにおける女性三世代の変容――

武　内　旬　子

はじめに――「母から娘へ」の神話

アシア・ジェバールはアルジェリア女性の代弁者のように目されることが多い。この見方は、たとえば、「ジェバールはこれら読み書きのできない女たちの書記となる[1]」というファルフドの表現に代表させることができるだろう。ジェバール自身が、しばしば引用される『居室にいるアルジェの女たち』の序文で、「《ために》でもなく、もっとひどい《ついて》でもなく、かろうじてそばで、できることなら身を寄せて語る[2]」のだと述べていることを見ても、成り代わって語る代弁者ではないにせよ、女性たち（ここで作家が身を寄せる対象はアルジェリア女性を始め、イスラム文化圏の女性たちとされる）を語ることがジェバールの主要テーマの一つであることは間違いない。そして、身を寄せる対象たる女性たちは、ジェバールを論じる多くの論者によって、「抵抗と原住民文化伝達の砦[3]」と見なされる傾向にある。だが、ジェバールの書くアルジェリアの女性たちは、実際に伝統を守る砦なのか。そしてこの作家は、母から娘へと伝えられる不変不動の伝統を書いていると言えるのだろうか。

また、この作家におけるもう一つの重要テーマが、母語以外の言語で書くこと、フランス語で書くという問題にあることは衆目の一致するところだが、果たしてジェバールの「母語」はアラブ語である、と単純化できるだろうか。母語といえば、母が語る、母が娘に伝える言葉のはずだが、ジェバール作品を読み込んでいくと、母語と外国語の対立以前に、すでに「母語」が複雑な様相を呈していることに気付かざるを得ない。そして、女性たちの系譜と言語伝達とは不可分に絡み合うのである。何をどう受け継ぐのか、母から娘へ、といった

1　Samira Farhoud, *Interventions autobiographiques des femmes du Maghreb, Écriture de contestation*, Peter Lang, 2013, p.66.

2　Assia Djebar, *Femmes d'Alger dans leur appartement*, Des femmes, 1980, p.8.

3　Giuliva Milò, Lecture et pratique de l'Histoire dans l'œuvre d'Assia Djebar, Peter Lang, 2007, p.81. フランス支配下のアルジェリアで、先住民が、自分たち固有の文化や習慣と考えるものを、植民地支配者に対する抵抗の拠り所とすることがあった事実については、つとに指摘されている。その過程で、先住民女性は、守るべき価値を体現すると見なされることになる。本論で後述する女性のヴェールについても、植民地支配がその使用を強化した面について、ファノンなどが指摘している。c.f. Frantz Fanon, *La sociologie d'une révolution,* Maspero, 1959.

定式化には収まりきらない継承の有様にこそ注目しなければならないのではないか。

本論は、この観点から、ジェバール作品の中でも「自伝的」と見なしうるいくつかのテクストを取り上げ、祖母、母、娘の三世代を中心に、さらに一部、曾祖母及び娘の娘まで含めた女性たちの系譜を考察する。年長の世代ほど保守的で若い世代に至って初めて変化が起こる、といった「進歩史観」は通用しないだろう。なお、本論の分析対象は、あくまで、登場人物である。取り上げるのは『愛、ファンタジア[4]』（以下引用では AF と表記。略号の後にページ数を表示する）、『牢獄は広し[5]』（以下引用では VP と表記）、『父の家に居場所もなく[6]』（以下引用では NP と表記）の三作品であり、どれも表紙には「小説」と明記されている。内容的に三作品とも作家の自伝的要素を含んでいることは確かだが、同時に、ルジュンヌ式の自伝契約の形式からは大きく逸脱している。たとえば、語り手は一人称、二人称、三人称と交替するし、固有名詞も一つではなく、一人称で書かれている記述内容が明らかにジェバール本人の自伝ではあり得ない場合もある。（この三作は出版の順に、語り手個人に関わる内容が多くなり、『父の家に居場所もなく』では、人称の問題などは別として、内容はほぼ語り手個人とその一族の物語となっている。）「他者の」言語によるエクリチュールはジェバールにおいても（おいてこそ）多くの問題を提起するのだが、それらを議論する前提として、女たちの系譜というテーマと密接につながる「母語」自体のありようを考察しておく必要がある。本論は、従って、「他者の言葉による自伝」を論じるための準備作業でもある。

ジェバールは、しかし、「他者の」言葉で自伝的作品を書く唯一の作家ではない。やはりフランス語で書くアルジェリア出身女性作家マリカ・モカデムにも、「小説」と銘打ってはいるが明らかに自伝的作品があり、その他にも自伝的要素を駆使した作品が多い。13 歳の年齢差（ジェバールは 1936 年生まれ、モカデムは 1949 年生まれ）や出身地、社会階層など、様々な違いはあれ、共通点も多い二人の作家の作品を、女たちの系譜という観点から比較することは、「他者の」言語による文学をより深く理解するためにも有効であると思われる。本論では、ジェバールを考察の中心としつつ、モカデムをも参照していきたい。モカデムを取り上げる場合も、「小説」の登場人物としての女性たちが分析対象となる。作品としては、『歩く人々[7]』（引用では HM と表記）と『す

4　Assia Djebar, *L'amour, la fantasia,* 1985, Jean-Claude Lattès.（本論では拙訳を用いるが、石川清子訳、『愛、ファンタジア』、みすず書房、2011 年、を参照させていただいた。）
5　ibid., *Vaste est la prison*, Albin Michel, 1995.
6　ibid., *Nulle part dans la maison de mon père,* Fayard, 2007.
7　Malika Mokeddem, *Les hommes qui marchent*, Ramsay, 1990.（引用は 1997 年の Grasset 版に↗

べてはあなたを忘れたおかげ[8]』（引用では JDT と表記）の二作が中心である。両作家の自伝的作品を総体的に比較しておくと、ジェバールの三作が複雑な構成および、自伝とは異質な要素を多く含むことを特徴としているのに対し（とりわけ『愛、ファンタジア』にそれが顕著であり後期になるにつれ、複雑さとハイブリッド性は減少していく）、モカデムにおける語りの構造は比較的単純であることを指摘できるだろう。だれが語っているのかを、常に問いつつ読み進める必要のあるジェバールに対し、モカデムの場合、『歩く人々』はレイラ、『すべてはあなたを忘れたおかげ』ではセルマという名の主人公を匿名の語り手が語る構造が一貫している。また名前は作家のそれと異なっているが、特に『歩く人々』の場合自伝的性格が強く（モカデムはインタビューなどでもこれを自伝として語っている）、主人公やその家族の物語以外の要素はほとんど含まれない。『すべてはあなたを忘れたおかげ』を自伝として読むか否かについては筆者は別稿[9]ですでに考察したのでここでは繰り返さない。上述のように、本論では、ジェバール、モカデムどちらについても、意味があると思われる場合、作家の経歴と対照させることはあるが、原則として書かれたものとして登場人物を扱い、自伝かフィクションかという問題を議論の中心とすることはしない。

1　祖母は移動する

語り手、あるいは主人公を「娘」と呼ぶことにすると、本論で取り上げる作品では、その祖母世代の存在感がきわめて大きいことをまず指摘しなければならない。これは両作家に共通する特質である。そして、もう一つ注目すべき共通点は、祖母の「移動」である。

1.1　歩く／語る

『歩く人々』の主人公レイラの祖母ゾフラは元遊牧民である。しかし、作品中、この祖母の移動は、遊牧民としての移動生活にとどまらない。レイラが生まれた時には、すでに祖母もその息子（レイラの父）も定住している。つまり、祖母は、遊牧民から定住民へという生活形態自体の大きな「移動」を経験しているのである。これは後に娘世代が経験するフランスへの移動にも匹敵する重大な変化ではないだろうか。しかも、娘世代の場合、外へ押し出す社会的

↘よる。

8　ibid., *Je dois tout à ton oubli*, Grasset, 2008.

9　武内旬子、「マリカ・モカデムと不穏な小説――母と娘と嬰児殺し」、『神戸外大論叢』、第 60 巻、第 2 号、2009 年 9 月、pp.45 ～ 66.

圧力[10]は無視できないとしても、最終的には自身の決断による移動であるのに対し、祖母の場合、テクスト中に明言されてはいないが社会的状況の変化ゆえの定住であり、祖母個人の選択によるものとは考えられない。「定住民の不動性、これが私の足をつかんだ死なんだよ。それが私から探求を奪ってしまった。今じゃ私には言葉の遊牧しか残っていない（HM 11）」という祖母の言葉からは、意に反しての望まない「移動」であったことが窺われる。

この祖母は、作中、母（祖母にとっては嫁。元遊牧民ではなく町の出身）を通り越して孫娘レイラに大きな影響を与えるのだが、それは上記引用にある「言葉の遊牧」によってである。レイラを始め多くの孫たち（レイラは 13 人兄弟の長子[11]）にゾフラは、「私たちはこの人たち、歩く人々の末裔なんだよ（HM 12）」と語りかけ、遊牧民の世界を言葉によって描いてみせる。それは、単なる思い出話ではない。「あらゆるものを手玉に取る。自分自身の物語だって（HM 12）」という祖母は、自らの一族を含む遊牧民たちの「歴史」を、伝説やフィクションを自由自在に織り交ぜて豊かに展開してみせる。子供たちは、自分たちの祖先を、その想像力ごと受け取っていく。『歩く人々』という小説は、祖母の語りに始まり、主人公の成長と葛藤を経て、テクストの最後で、主人公が祖母のアラブロ語による語りを、今度はフランス語のエクリチュールによって実践していこうとする地点に達する物語として読むことができる。祖母は、孫娘が作家になる起点でもあり、モデルでもある。祖母の人生は、大きな「移動」を経験するものであった。孫娘もまた、言語、生きる場所、女性としての社会的役割など、様々な局面における大移動を経験する。不動の伝統ではなく、根底的変化をもたらす移動において、祖母と孫娘はつながっているのである。

なお、ゾフラはかなり理想化された登場人物ではあるものの、否定的側面が全く描かれないわけではない。第 1 子であるレイラが生まれた時、「眉を顰め、女の子を産んだ町出身の嫁を睨み付ける（HM 72）」ゾフラを、語り手は「知性と寛容の人であるゾフラでもこの反応から自由ではなかった（HM 72）」と批判的に見ている。女性に対する差別を女性自身が再生産するという悪循環は、ここでも断ち切れないのである。ただ、もう一つの差別、黒人やユダヤ人に対する人種差別に関しては、レイラの母を筆頭に周囲の人々が差別意識を色濃く持つ中で、ゾフラは、そうした言動を諫める側に立つ。黒人に侮蔑的な言

10　一つではないが、象徴的なのが、独立後の蜂起記念日に、ヴェールをつけていなかったことが理由でレイラが集団リンチに遭いかけた事件であろう。c.f. HM 13 章

11　インタビュー等によれば、モカデム自身 13 人兄弟の長子であり、ゾフラに関する設定もほぼ、モカデム自身の祖母の場合に一致する。

葉を使った親族の子供に、「そんなに黒がきらいなら自分の目の黒いところを取っておしまい（HM 160）」、と叱り、「それに忘れちゃいけないよ。おまえたちみんなに黒人の血が流れているんだから（HM 160）」と、祖先の一人が、白人女性よりずっと美しかった黒人女性の召使いに子供を産ませた話をする。ジェバールはほとんど取り上げないのだが、モカデムは、アルジェリアにおける黒人に対する根強い差別をいくつかの作品に批判的に書き込んでいる。これは、モカデム自身が、家族の中でも、ぬきんでて濃い色の肌と縮れた髪の毛を持っていることと無関係ではないと推測される。作家と主人公を単純に同一視はできないにせよ、『歩く人々』のこの箇所は、モカデムの、ゾフラを通しての自己肯定の試みと解釈することは可能だろう。

1.2　複数の系譜

ジェバールの場合、祖母は父方、母方の二人を検討しなければならないが（モカデムでは父方のみ語られる）、特に母方の祖母が、自分の意志で移動する登場人物であることに注目したい。

まず父方の祖母だが、主人公あるいは語り手の幼少期、同居していたのはこちらの祖母であるにもかかわらず、『愛、ファンタジア』、『牢獄は広し』、『父の家に居場所もなく』の三作とも、言及は、母方の祖母に比べずっと少ない。しかし、母方の祖母と対照的なその特徴は一貫しており、主人公あるいは語り手である孫娘の愛情が読み取れる記述になっているのは、こちらの祖母に関してである。「静かな女性（AF 218）」、「この無口な優しさ（VP 289）」、「優しいおばあちゃん（NP 23）」、という一連の表現から、口数が少なく性格的にもおとなしい女性が浮かび上がってくる。また、母方と異なり、同じ町（地中海に面した古都セザレ）でも比較的貧しい階層の出身であることも繰り返し言及されている。小学校教師である一人息子の勤務地に移動して暮らすわけだが、この移動は彼女自身の選択というよりは生活上の必然であろう。モカデムの祖母の場合ほどラディカルではないにせよ、この移動も少なからぬ変化を伴う。セザレの町ではアラブ人街の小さな家に住んでいたのだが、勤務先はサヘル（地中海沿いの低い山地）の村であり、何より大きな違いは住居が、ヨーロッパ人教員用に建てられたヨーロッパ風アパートだということである。しかも主人公一家はこの建物に住む唯一の「原住民」家族である。この住居での祖母の生活については詳しく語られないが、外出機会も少なく、母（息子の嫁）以上に孤立していたであろうと思われる。ひっそりと暮らす控えめな女性は、しかし、「最も純粋に私を愛してくれた（NP 27）」と孫娘が述べる人物であり、最後の時はセザレの家で迎えたらしいのだが死の様子は書かれず、かわりに孫娘のい

だいた激しい絶望感のみが書き込まれる[12]。

一方、母方の祖母は「あれほど恐ろしい人として私（孫娘――筆者注）が知っていた人物（VP 214）」とも表される、父方の祖母とは対極にあるような登場人物である。「恐ろしい（terrible）」とは、並外れていることにも対応する言葉だが、この祖母は、強い意志と行動力で自らの人生を切り開く人物であり、伝統墨守よりは伝統破壊的な面が目立つ。『愛、ファンタジア』では、人生の後半になって（従って孫娘が子供時代に目撃する）、彼女が定期的に行う一種の「ガス抜き」パフォーマンス（自宅に音楽家を呼び、香を焚いてトランス状態に入って踊る）のシーンは詳しく描かれるが、その経歴については『牢獄は広し』で語られる。自伝的三作の主人公または語り手、そして作家自身も、アラブとベルベルの双方を自分のルーツと認識しているが、セザレがアラブ世界を代表するのに対し、それとベルベル世界をつなぐ役割を果たすのがこの祖母なのである。

『牢獄は広し』の 1 章は祖母（ここではファティマと呼ばれる）の伝記ともいえる語りにあてられている。セザレの町の背後に広がる山地ダフラ（ベルベル系の人々の居住地）でよく知られ、尊敬されている聖人の子孫の家に生まれ、特別な血筋を誇りとするファティマは、野心家の父[13]により、14 歳でセザレの資産家ソリマンに第 4 夫人として嫁ぐ。ソリマンは「すでにその孫がひげを生やしていた（VP 204）」年齢である。しかし、14 歳の花嫁だった祖母を想像して語るというテクストの記述には悲劇的雰囲気は一切なく、都会の女性のかぶるヴェール[14]を身につけることを誇りとするなど、花嫁自身が肯定的にこの結婚を受け入れている様が描かれる。セザレで最も豪華な屋敷で、数多い親族に囲まれ「女主人として、王女として（HM 209）」3 年間過ごした後、若い寡婦となったファティマは周囲の反対にもかかわらず自分の意志でダフラの山へ戻る。その後、同じ地方の別の名高い聖人の子孫と再婚、その夫の死後、3 人目の夫と結婚して生まれた娘（バヒア）が主人公または語り手の母である。バヒアが 3 歳になろうとする頃、ファティマは山を下り、セザレに居を定める。自身の土地や財産を自分の才覚で自由に管理することを求め、夫と別居するのである（後に離婚）。ここで、ファティマの断固たる選択は、あくまで

12　c.f., NP 22.

13　ファティマの父フェルハニは、娘の結婚と同時に、婿ソリマンの娘の一人アムナと結婚する。アムナは母方が裕福で、彼女がもつ財産が目的の結婚である。ファティマの母である第 1 夫人は、夫に命じられて第 2 夫人を迎える婚礼の準備中に倒れて急逝する。この死については短く、しかし同情を込めて語られるが、ファティマとその母との関係に関しては語られない。

14　全身を覆う白い布でありハイクと呼ばれる。これは洗練された都会人女性の象徴として、ジェバール作品にしばしば現れる。母とこのヴェールについては本論第 2 章で考察する。

「イスラムの法に則し（VP 252)」、カーディー（イスラム法の裁判官兼公証人）を通した正式なものであることを語り手は強調する。20 世紀の初頭、フランス支配下にあったアルジェリアの一地方都市で、イスラム法は、このような自由を、意志と実力に恵まれた女性に認めていたのである。だが、「ダフラは古い抵抗の地（VP 232)[15]」であると同時に「女たちの苦い思いの地（VP 232)」でもあるとファティマは考える。ダフラは、ノスタルジーと共に語られる側面もあるが、けして理想化された起源の地ではない。

なお、ファティマの出身地はベルベル語世界だが、アラブ語を、どの時点で身につけたかについて、テクストは語らない。彼女が、セザレではアラブ語（セザレの優越性の記号としてジェバールはしばしば町の女性たちの洗練されたアラブ語に言及する）を、山からやってくる所有地の小作人たちとはベルベル語で話すと、特に説明もなく書き込まれている[16]。

孫娘が直接知っていて畏怖を覚えるこの祖母以外にも、『父の家に居場所もなく』では、もう一人、世代をさかのぼったところに抵抗者としての女性がいる。父方のやさしい祖母の母（語り手の曾祖母)、ベルベル系の緑の眼をしていたというこの女性について語り手に話してくれた老人は彼女を「異議申し立て人（NP 39)」と呼ぶ。直裁な物言いと行動力を持つ女性で、その性格は、大人しい娘（語り手の祖母）ではなく、その息子、つまり語り手の父に伝わったという。父は、フランスの設立した公立学校で現地人児童に教える教師として、フランス人の差別や偏見と戦おうとする人物である。

世代をさかのぼるほど保守的であり、かつて、女性は家に閉じ込められて無力だったという思い込みを、これらの祖母や曾祖母は覆す。彼女たちはすでに移動と根底的変化を、二言語使用をも含めて自ら体験していたのである。

2　母は「産む」

祖母世代がすでに変化の相にあることを述べたが、両作家の母世代を比較すると、守るべき、もしくは還るべき価値の象徴として一律に「母」のイマージュを用いることの無理が見えてくる。

15　ファティマの 2 人目の夫の祖先は、フランス軍に対する抵抗でも知られた人物であった。

16　二つの世界を往還し、自立した女性でもあるこの祖母の勇気は別のエピソードでも表現される。自分の子供たちがセザレの町で流行したチフスにかかったとき、家にフランス人の医者の往診を頼んだのである。セザレのアラブ人では初めての行為で、それは「この町では一つの革命だった（VP 235)」。この時、一人息子（二人目の夫の子）と末娘（バヒア）は助かるが、二人目の夫の長女は亡くなる。

2.1　子を産む母、充足する母

モカデム作品の「母」は、一点に収束して描かれる。文字通り、子を産む母、生物学的機能に特化した母である。あるいは、逆転して「子を殺す」母ともなる。『歩く人々』では、レイラの「記憶をどこまで遡っても、母はいつも妊娠していた（HM 115）」。13 人兄弟の長子（モカデム自身と同じ）の眼からみれば、これが母の「現実」なのだろう。4 歳の頃から弟妹の世話や家事を担わされ、しかも母の「膝にも胸にもレイラの場所はあったためしがなかった。やさしい言葉は男の子にのみとって置かれた。少女は母から命令と叱責しか受けなかった（HM 115）」という環境でレイラは育つ。反抗する娘が母に「おかあさんは子供工場にすぎない（HM 116）」と侮辱するつもりの言葉を投げかけた時、母はその言葉にむしろ満足した様子をみせる。「腹の戦いの勝者（HM 140）」はそのことに充足している。伝統社会の母、というステレオタイプをさらに強化した、ほとんどカリカチュアのような登場人物である。

しかし、ここで重要なのは母が充足した人物として書かれていることではないだろうか。語りはあくまで、母に愛されないことに傷ついている娘の批判的視点からなされるにもかかわらず、その娘から見て母は充足しているのである。娘は母を反面教師として、正反対の方向へ進むのだが（「私は絶対に子供はつくらない（HM 253）」という言葉を「信念というよりは悪魔払いの言葉（HM 253）」として）、『歩く人々』の母は、伝統社会の抑圧に呻吟する欲求不満の女性、では全くない。舞台はサハラ砂漠の縁に位置する辺境の村であり、社会階層も比較的低い家族だが、自らの存在理由を正確に知る母は、その役割を充分に果たして堂々としていると言うこともできる。アルジェリア出身の女性作家にしばしば期待される女性の代弁者としての役割など無意味とでも言うかのように。非識字者の母だが、エクリチュールによって「代弁」されなければならない理由などないのだ。エクリチュールを必要とするのは娘の方なのである。

モカデムにおける母娘関係を考える際、もう一つの小説『すべてはあなたを忘れたおかげ』を無視することはできない。ここではセルマと名付けられた主人公が、母娘の困難な関係の原因は、幼くして、母の嬰児殺し（間引き）を目撃したことが原因なのだと成人した後に気付き、母に釈明を求めるもはぐらかされ、その後の母の死によって探求が断ち切られてしまうという内容を持つこの小説は、筆者がすでに考察したように、母を断罪すると同時に、何とかそれを避けようとする、矛盾した欲望が共存するテクストである。ここで、母は全く別次元にいるかのように、娘の詰問に答えようとしない。しかも、その拒絶は、死によって完遂されてしまう。娘が謎に迫ろうとしても母は逃げ去ってし

まう存在なのだ。セルマと母という登場人物の設定は明らかにモカデム自身の経歴に沿うものだが、現実がどうであったにせよ、自伝的な二つの小説において、多産で伝統的な「母」は、娘のエクリチュールによる探求が捕らえきれぬ存在として、言うなれば批判的エクリチュールの裏をかいて立ち現れてくるのである。

2.2　自分を産む母、動く母

モカデム作品の母が、「母」という機能に集中して書かれるのに対し、ジェバール作品の母は、より多面的に構成される。本論で取り上げる登場人物すべての中で、最も幅の大きい変化を遂げるのはこの母かも知れない。

前章で見たように、ジェバールの自伝的作品では、主人公あるいは語り手の母方の祖母が、ベルベル系の山からアラブ人の町セザレへ移動するのだが、二度目の最終的移動の際、彼女に伴われて山から下りたのが当時 3 歳になろうとしていた母（『牢獄は広し』ではバヒアと呼ばれる）である。バヒアは、ベルベル語とその文化的環境から引き離され、母と離れたわけではないが母語は喪失する。バヒア自身の娘は、フランス語世界で生きることになり、それを「亡命」とも呼ぶのだが、すでに母が、「亡命」を経験していると言えるだろう。また、娘は、フランス語教育を通じて、フランスのみならず古典をも含めてヨーロッパ文化の教養を身につけるのだが、母もまた、移動先のセザレに古くから伝わる文化の継承者を自認するようになる。しかし、その文化は、アンダルシアから伝えられたという音楽（歌）であり、アンダルシア風と言われる洗練されたアラブ口語なのだ。自伝的作品はもちろん、それ以外でも、ジェバール作品には都会風、洗練された、上品なというニュアンスを担って「アンダルシアの」という形容詞がよく現れる。これに対比されるのが、田舎風の、粗野な、山の住民の世界である。ジェバールによれば、セザレの住民の一部は、「素朴な虚栄心から、かつてコルドバやグラナダにあって彼らが失った家の鍵を公然と見せつける（VP 170）」ほど、祖先がアンダルシアの出自であることを誇りにしているという。彼らは、イベリア半島におけるレコンキスタによって、地中海を渡ってマグレブに来ることを余儀なくされたイスラム教徒たちである。つまり、ここでは、地中海の向こうから亡命先へともたらされた文化を、ベルベル世界から移動してきた女性が引き継ぐのである。

興味深いことに、上記引用の直前の箇所では、語り手の母はセザレの、こうしたアンダルシア出自を標榜する家族たちの真ん中で生まれた、と書かれている。同じ小説『牢獄は広し』の少し先では、祖母の来歴と母の子供時代がかなり詳しく語られるので、生地に関する記述が矛盾していることになる。娘の生

地の問題と合わせて後述するが、物理的な「生地」と継承されるものは必ずしも直結しない。

生まれは別として、実質的にはセザレで育った母は、同じ町の出身で比較的貧しいが、フランス学校の教員を養成する師範学校を出た青年と結婚する。これが、彼女を、また別の世界へと導くことになる。夫の赴任地は前にも述べたサヘルの小さな村であり、住むのはヨーロッパ式のアパート、同じ建物の住民は彼女の家族の他はヨーロッパ人である。

語り手が子供時代を過ごすこの村での母は、都会風ハイクに身を包みハマム（公衆浴場）でも特別扱いを受ける（ハマムに持参する道具も洗練された一級品である）、明らかに村の女性たちとは異なる存在である。夫の方も、植民地支配者と被支配者との間をつなぐ位置にあり、村社会の中で、敬意を受けながらも特殊な存在である。語り手は幼い頃、「オリエントのプリンセス（NP 70）」のような母の先導役をして道を行くことに誇らしい気持ちをいだく。しかし、母は、「美しいモーレスク[17]の役を演じる（NP 90）」ことにとどまってはいない。第二次世界大戦中、ドイツ軍による空襲があって防空壕に避難した際、同じ建物の普段はつきあいのないヨーロッパ人住民と、母はおぼつかないフランス語で話す。興味深いのは、まだ幼くフランス語を学ぶ前の年齢だった語り手の反応である。母がこの言葉を話すのを初めて聞いた語り手は、セザレのアラブ語を話す時には「尊大さ、優雅さと言えるもの（VP 257）」を持つ母が、「彼らの言葉（フランス語――筆者注）に入っていったということだけで、不器用なところを見せることができる（VP 257）」ということに衝撃を受ける。「彼らの言葉」は、母を傷つけるもの、語り手が母にいだく高い評価を揺るがせるものとして立ち現れるのだ。

しかし、この母子は双方とも、その後、どんどんフランス語の方へ接近する。後の独立戦争時、語り手の弟は留学先のフランスで逮捕、投獄されるのだが、息子に面会するため、母は、一人ででもフランスへ渡ることを「夜遅く、台所で、静かに、一人で決意した（VP 183）」。母のフランス行きは、1章を使って詳しく語られるが、最も強調されるのは、ヴェールは付けず、フランス風の服装をした母が、アラブ人に見えないこと、非常に若く、エレガントな南欧系のブルジョワ女性に見えることである。さらに、母のフランス語の上達ぶりも「変装」を完璧にする。独立戦争時、若いアルジェリア女性がヨーロッパ人に「変装」して特に都市部での独立闘争に貢献したことはよく知られてい

17　イベリア半島のイスラム教徒を意味するスペイン語に由来するフランス語で一般には北アフリカのイスラム教徒を指す。ジェバールのコンテクストでは、イベリア半島（アンダルシア）由来という点が重要。

る。活動家ではないこの登場人物の場合、植民地支配を進めるために女性を取り込むべく、ヴェールを取らせて「フランス化」しようとした支配者との共犯を象徴するのだろうか。ファノンなどにも見られる「共犯」説は、被支配者は優位に立つ支配者に憧れ、同一化することで被支配者の位置から抜け出たいという欲望を持つことが前提とされているように思われる。ジェバール作品の母の場合、「モーレスク」においても、洋装においても、その優雅さは同等であり、セザレの名望家出身者としてのゆるぎない自信は、自分をフランス人に対して劣位に置くことがない。『牢獄は広し』における母方一族の系譜の物語は、植民地支配者と被支配者の優劣関係を無効にしかねないこの自信をこそ語っていると読むこともできる。母のフランス行きのエピソードは、むしろ、植民地の原住民という、支配者にとって絶対的「他者」であるべき存在が、簡単に自分たちと見分けがつかなくなる事実を突きつける役割を果たすのではないだろうか。

ヴェールを付けた優雅な女性は、必要とあらば一人で考え、決断し、実行する自立した女性でもある。フランスへ行くときだけでなく、アルジェに引っ越してからは日常生活においてもヴェールを付けずヨーロッパ風の服装ですごし、独立直後には自動車の運転免許を取る。父は運転できず、母が家族の運転手役を務める。そして、離婚に直面した語り手を導くのは母である。「母はやる気満々で、戦う準備ができていることがわかった、しかし、何の戦いなのか（VP 305）」と、母は語り手以上に毅然と問題に立ち向かう姿勢を見せる。「あなたの権利を守るために何をしたいの？（VP 306）」とたたみかけ、「この国には法律があるのよ、自分を守りなさい！（VP 306）」と娘を激励し、即座に弁護士のところへ連れていくのも母である。この時、語り手は、目の前の母だけでなく、祖母にもつながる。

> 「彼女は私を導いた、母は。（中略）ほとんど眼を閉じたままの私を前へと進ませたのは、亡くなった母の母のエネルギーだった（VP 306）。」

ところで、変化する力を母に与えるのは、その母（語り手の祖母）由来のエネルギーだけではない。夫との、当時のアルジェリア社会では珍しい関係がそれを後押しする。旅先から夫が送ったはがきの宛名に妻の名が書かれていたことが、隠すべき妻を人目にさらす行為として妻の親族たちの間でスキャンダルになるという『愛、ファンタジア』のエピソード[18]は、この夫婦の特異性を際立たせる。『父の家に居場所もなく』では、両親が愛し合っていることがより鮮

18　c.f. AF pp.46 ～ 49.

明に書かれる。

> 「自分自身の力で、知性で、しかし同時に夫が彼女に与える密かな自信のおかげで、母は動く女になる（NP 381）。」

夫の愛情が妻に自信を与え、変化を支える一方、夫の方も、妻の変化につれて変わる。

> 「若い夫の妻への愛情（安定した、控えめな愛）は、両性間の古くからの硬直した関係からようやく出ようとしていた社会においては、小さな革命（NP 318）」

だった。ベルベル語からアラブ語、さらにフランス語へと移動し、「オリエントのプリンセス」から「動く女」になるまで、母は絶え間ない小さな革命を生き続け、子供だけではなく、常に自分を新たに産み続けたと言えるのではないだろうか。

3　娘の受け取るもの

祖母、母の二世代がすでに、大きな変化を生きてきたことを前章までに見てきたわけだが、その次に来る娘世代は、先行する女性たちの系譜の相続人となるのだろうか。

3.1　母からの遁走

『歩く人々』のレイラは、歩く人から語る人となった祖母の継承者として、砂漠を歩くかわりに海を渡り（フランスへの移住）、今度は自分が語り手（作家）となろうとする。この過程は、祖母の継承であると同時に母の拒絶として現れる。思いがけなくフランス学校で教育を受ける機会に恵まれたレイラは[19]、自分を家事育児の労働力としてしかみなさない母からの圧力に抗して本の防壁を築く。フランス語の書物は、それに没頭することで受け入れがたい現実を忘れる手段であり、母の入って来れない領域を確保する手段でもある。被支配者自身を植民地支配の「共犯」に仕立てる意味をも持つ学校教育は、少女

19　この点では、モカデムとジェバールの 13 歳の年齢差の持つ意味が大きい。フランスは、植民地支配の最後になって、ようやく、原住民に対するフランス語の学校教育を拡充するからである。なお、ジェバールでは、娘は父と手をつないで登校するが（AF 11 他）、最初の登校日にレイラに付き添うのは祖母ゾフラである（HM 85）。

が、自分に用意された人生、自分の母と同じく、子供を産み続ける母となることに対する必死の抵抗を助ける。もちろん、この抵抗自体が、支配者の価値観の刷り込みによるものと解釈することは可能である。しかし、家父長制の強化による植民地支配への対抗が、どのような否定的側面を持つのかを、『歩く人々』が明らかにしていると考えることもできる。祖母由来の遊牧民の「伝統」は肯定的に（しかしすでに消滅したものとして）、母に象徴される家父長的家族の子孫繁栄は否定的にと、対照的に書かれることで、この小説は、娘世代が第三の道を行くことを正当化する。なお、『歩く人々』は主人公の 10 代までの物語なので、彼女が祖母の語りをどのように継承するかは具体的に語られることはない。もちろん、レイラをモカデムと重ねるならば、この小説を書くこと自体によって継承がなされると読むことができる。

もう一つの自伝的作品で母娘関係が主題となる『すべてはあなたを忘れたおかげ』では、主人公セルマの出自に関する要素はほぼ自伝的と考えられ、医師という職業もモカデムと同じである。ここでは、母から遁走した娘が、反転して母と向かおうとすると母の方で逃げ去ってしまう。二人は、結局、対等に出会うことができない。モカデムの他の作品を、母娘関係の視点から読み直すと、娘の幼少時に死亡したり、娘を捨てるなど、良きにつけ悪しきにつけ長期にわたってこの関係が続くことがない。最新作『欲望する女[20]』では、生まれてすぐ捨てられたという設定の主人公は、母に関する情報を全く持たない。多産な母を持ったこの作家の女性主人公全体が、母と切り離されているのだ。母を切り離すことで自由を得た娘たちは、祖母とは異なる航跡を描きながら移動することで、新たなアイデンティティーを探求する人物と言えるだろう。しかし、「母」（母、家父長的家族の価値観、アルジェリア社会などを含む）を切り離したにもかかわらず、この探求は決して「母」と無関係ではない。ジェバールと異なり、フランス語で書くことに迷いのないように思われるモカデムが、地中海の南を書き続けているという事実は、切断の難しさをこそ示しているのかもしれない。

3.2 「逃亡者」の系譜

祖母の後継者という意味では、ジェバール作品の語り手や主人公も同様である。『牢獄は広し』では「私はまず第一にこの無口なやさしさ（父方の祖母――筆者注）の娘なのだ（VP 289）」、『父の家に居場所もなく』では「私は断固、この祖母（母方の祖母――筆者注）の子孫なのだ（NP 241）」と、両方の祖母の末裔であることを自認している。しかし、モカデムと異なりジェバール

20　Malika Mokeddem, *La désirante*, Grasset, 2011.

のテクストには、自分を相続権を奪われた者と形容する表現[21]が多出する。独立前のアルジェリア社会一般というよりは、セザレのブルジョワ社会の規範に沿った成長をしなかったこと、思春期になってもフランス語の学校教育を受け続け、外出時にヴェールも付けず、結婚まで家にとどまるという生き方をしなかったこと、そしてアラブ口語は話せても、古典アラブ語を習得できなかったこと[22]などがその理由と考えられる。にもかかわらず、母方の祖母の「思いがけない、潜在的なエネルギー（NP 196）」は、相続権のない娘に残された遺産なのである。前章でも指摘したように、離婚しようとする娘を勇気づける母を通して受け取るのも、このエネルギーである。

祖母に連なる系譜に位置させながらも、ジェバールのテクストは、語り手あるいは主人公を、親族の女性たちとは一線を画す場所に置く。『愛、ファンタジア』ですでに、フランス学校に通う娘は、親族の眼から見て特異な存在だが、『牢獄は広し』と『父の家に居場所もなく』では、娘の側からも差異性が主張される。その表現手段となるのがダンスである。このダンスは『愛、ファンタジア』の母方祖母によるトランスのパフォーマンスとも対応し、娘が、継承しつつも独自である自分を構築する手段でもある。セザレの社交シーズンに、この即興的で、「一人で踊る、逃げ去るような（VP 62）」ダンスは、「《モダンな》と、私のファンタジーに失望した婦人たちは言っていた、それは裏切りに見えるらしい……しかし何を裏切るというのか（VP 62）」とあるように、特に年配のブルジョア女性たちの眉を顰めさせる。「神経質な、ハイブリッドなダンス（VP 62）」の踊り手は、「年配のご婦人たちのロジックに入ること（NP 187）」を拒否し、「ここから遠く離れたところにいることを感じるため、この女性たちから身を隠すために踊るのが好き（NP 194）」。同年代の従姉妹たちなどに対しては、自分一人がヴェールも付けずに外を歩けることに後ろめたさを覚えつつも、年上の女性たちが規範をはずれる身体に注ぐ批判的まなざしには、孤立したダンスで防壁をめぐらすのである。たとえ「異邦人（VP 279）」と評価されることになっても。

モカデムの場合と異なり、母もまた、娘の防壁になってくれる。「あなたの娘はまだヴェールをつけないの（AF 202）」という質問に「あの子は読んでるの[23]、と母はそっけなく答える（AF 202）」のである。また、ある従姉妹の婚礼の場で娘のダンスを見た客の婦人の一人が、息子の嫁にと言ったという話を人

21　主に «déshéritée»（女性形）。相続権を奪われた者の意。貧しい、恵まれないなどの意味もある。

22　幼少期にコーラン学校に通ったのみ。

23　ここで用いられている動詞《lit》はフランス語の通常の用法では「読む」を意味するが、対応するアラブ語は「勉強する」をも意味する。

づてに聞いた母は「どちらにせよ父親はあの子をできる限り勉強させておくでしょうし。そのご婦人には、嫁はよそで探すように言ってちょうだい（VP 280）」と、相手にしない。両親が共に[24]、娘を、「年配のご婦人たちのロジック」から守るのである[25]。娘が離婚の危機に直面したとき、母が積極的な導き手としての役割を果たすことはすでに指摘した。絶えず変化することを恐れない「動く女」というモデルを娘に与えるのは母である。

では、子を産むものとしての母役割はどう引き継がれるのか。モカデムでは、娘は産むことの絶対的拒否に至る。ジェバールの娘の場合、母であり母でないということになるだろうか。というのも、身体的理由で不妊であることが判明した娘は「喜んでその宣告を受けた。私はだから完璧に不毛というわけだ（VP 313）」と、徹底的にポジティブに、産めないことを受け入れるからである。むしろ、産まずにすむことを幸運に思う、と解釈することさえできるだろう。「喜んで[26]」と訳した語は、「楽しく、うれしそうに」とも訳せるし、「完璧に[27]」は「すばらしく」という肯定的意味合いを持つ。産めない女性に対して理解があるとは思えない社会的環境にあって、この「明るさ」は注目に値する。ところで、この箇所の直前には、産み続けることに疲弊してそれを嘆くもまた妊娠し、結局流産のせいで亡くなる女性のエピソードが書き込まれている。ジェバールは別の作品[28]でも、度重なる妊娠にそっとため息をつく女性を描いている。モカデムのような正面からの激烈な告発ではないが、生み続けることを負担に感じつつそれを表明できない立場の女性に寄り添う形での静かな批判という戦略を読み取ることができる。

しかし、ジェバールにおいて、「産まないこと」はただちに「母でないこと」ではない。『牢獄は広し』には、不妊を「明るく」受け入れた主人公が、血縁の子供ではなく「心の子供（VP 313）」を、孤児院で選ぶ場面がある。この小説では、語り手の人称が変化するのだが、この場面は、それまで比較的長く続いてきた一人称ではなく、三人称の語りであり、主人公の名（イスマ）が改めて指摘されるなど、フィクション性を強調する形式をとる。しかし、その15年後の場面では、「15年後に、私は彼女のためにその瞬間を説明する（VP 318）」、と一人称である（ここでの「彼女」は、語り手が選び、心の子供とし

24　ジェバール作品における父の重要性はつとに知られている。フランス語世界に導き入れるのも父である。この主題については、別稿をたてて論じたい。
25　『歩く人々』のレイラが両親によって強制結婚させられそうになり、からくも逃げ出すエピソードと好対照をなす。
26　《joyeusement》
27　《merveilleusement》
28　Assia Djebar, “La femme en morceaux”, in *Oran, langue morte*, Acte Sud, 1997.

て育てた女の子であり、血縁の子の場合と同様、テクスト中は「娘」という語で表現される人物である)。15 年の歳月を経て、「彼女（イスマ）の子供」は「私の子供」になる。

この、最も若い世代の娘についての言及は少なく、どこでどのように育ったか読者には不明なのだが、『牢獄は広し』の終わり近くには重要な一節がある。フランスに住む語り手は、アルジェリアにいる娘からの電話で、父（語り手の最初の夫）の出身地での教員ポストを薦められたと聞くやいなや、「次の飛行機に乗ってちょうだい、お願い。帰ってきて（VP 330)」と反応する。「帰る」のはフランスに、である。最初の夫の生地では、女性たちが自分の夫を「敵」という言葉で語るのが習慣だったこと[29]を思い出しての反応である。こうして語り手は、

> 「自分が、一人娘を通して、これまでのところ祖母（ザウィヤ[30]を離れ、最終的に町に降りてきた）と母（自ら古いものに背を向け、本能的に新しいものに開かれた）にわずかに示されてきた伝統を維持したのだ、ということを理解したところだった。私は、父の土地に根を下ろそうとしていた娘を、新たな逃亡者にしたのだ（VP 320)。」

「逃亡者（fugitive　女性形)」とは、それと知らずに逃亡者になってしまった存在として、語り手が自己を定義する表現の一つであり、『牢獄は広し』第３部の序文的文章のタイトルでもある[31]。本論で取り上げたジェバール作品の女性登場人物たちは、このように、移動や変化、それぞれがそれぞれの形で「逃亡者」になっていく。自らを相続権なき者と呼ぶ娘が相続するのは、この、変化し続けるという「逃亡」の「伝統」に他ならない。

おわりに――母ならざる言葉

女性たちの系譜は、それ自体が変容の連続である。と、するなら、母語はどうなるのだろうか。ジェバールやモカデムのような、母語以外で書く作家には、どの言語で書くのかという問題がつきまとう。本論で検討してきた女性たちの系譜の中で言語の「相続」とはどのようなものなのか。

29　c.f., VP 107.

30　イスラム教の宗教関連施設。母方祖母の一族は聖人の子孫で、ダフラ山中のザウィヤを本拠地とする。

31　そもそもは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』の登場人物ゾライデ（アルジェリア人女性で、手紙を書くことでスペイン人捕虜と共に家からの脱出に成功、スペインに渡る）に自分をなぞらえる文脈で用いられる。

モカデムに関していえば、エクリチュールの言語がフランス語であるのは自明であり、母語と切り離されたことに対する複雑な感情などは、少なくとも作品からは読み取ることが難しい。書記言語としての古典アラブ語が身近にある環境ではなかったこともその理由の一つかもしれない。しかし、最大の原因は､本論でも見てきた「母」との関係にあるのではないだろうか。自らを「母」と切り離すことは、娘が自身の生を生きるための最大の課題であり、フランス語によるエクリチュールは、むしろ、その最も有効な解決手段となるのである。従ってモカデムは自分にとってのフランス語を「養母語（langue nourricière）[32]」と定義する。「母」の言葉はむしろ娘から言葉を奪い沈黙へと追い込む危険がある。それに対し、血縁でない子供に乳を与える「養母[33]」こそが作家を産むのである。

これに対し、ジェバールは『愛、ファンタジア』で「フランス語は私にとって継母の言葉（AF 240）」だという。ここで用いられている「継母（marâtre）」という単語は、古くは単に継母の意味だったが、現在のフランス語では「意地悪な継母（ままはは）」といった意味を持ち、単に継母を指すためには用いられない。ジェバールはこの単語を『牢獄は広し』において、母方の祖母の父が、娘の結婚とほとんど同時に結婚した第 2 夫人アムナを指示するためにも用いるのだが、アムナは、夫と急死した第 1 夫人との間の子供たちを献身的に世話するよき継母として描かれている。従って「継母の言葉」を否定的意味にのみ解釈することには慎重でなければならないが、否定的ニュアンスが出てくることは否めない。しかし、否定的ニュアンスを持つのは「継母（marâtre）」だけではない。上記引用の直後には「私を道端に捨てて逃げ去ってしまった私の母の言葉とはどんなものなのか（AF 240）」と続く。「私」がフランス語を選んで母語を捨てたのではない。母の言葉の方が「私」を捨てたのだ。4 歳でフランス学校（日本の幼稚園に対応する）に入学させたのは父であり「私」が自ら選んだわけではないのだから、「私」に母語を捨てた責任はないということだろうか。『父の家に居場所もなく』では母語は「心の言葉（NP 305）」と呼ばれ、さらにはコレージュでは古典アラブを学ぶことを要望するも、他に希望者がなく、授業が開講されかったため、あきらめざるを得なかった経緯が語られる。

ジェバールにおける母語とフランス語の問題には、様々なアプローチが可能であり、また必要だが、本論の考察から見えてくるのは、「母語」もまた、女

32　Malika Mokeddem, *N'zid,* Seuil, 2001, p.16.

33　《langue nourricière》の形容詞《nourricière》は名詞《nourrice》から派生したもので、名詞は「乳母」を意味する。なお、モカデムにおける「養母語」の問題については拙論参照。「砂漠の作家の海洋小説――マリカ・モカデムと「養母語」文学の可能性」、『神戸外大論叢』、第 63 巻、第 2 号、2013 年 3 月。

性たちの系譜において変化することである。母方の祖母はベルベル語世界からアラブ語世界へと移動し、その娘である母は、母語であるベルベル語を失いアラブ語を「継母語」とする。しかもセザレに移動してきた母が、あたかも先祖伝来の文化として受け継ぐのは、アンダルシアからやって来たと標榜される言葉や歌であり、この意味でも母は「他所」の言葉を「継母語」とすると言えるだろう。そして母は、さらにフランス語という「他所」の言葉をも自分のものにしていく。つまり娘にとっての「母の言葉」には、ベルベル語（祖先の言葉とされるが、自分には話せない、間接的な母語とでもいうもの）、セザレのアラブ口語（他所者の母に伝えられる、他所から来てセザレに根付いた言葉）、そして父から与えられ、母とも共有する「他者の言葉」フランス語が含まれるのである。

先祖と生地と言語は、一直線には繋がらない。起源はすでにハイブリッドなのだ。ジェバールは、自分はセザレの出身であると述べており、作家を紹介する様々な文献や資料にも常にセザレ（現シェルシェル）出身と書かれている。『牢獄は広し』には、母バヒアが長子（語り手）を産むのはセザレではなく、夫の勤務地であるサヘル地方の村であることが書き込まれている。母はセザレに里帰りして出産する予定だったのが予定より早く産まれてしまった。「第1子はあたかも亡命先で産んだようなもの（VP 240）」なのだ。生まれるはずのなかった「他所」で生まれてしまった娘は、生まれながらの「亡命者」なのである。（カルーグルベルは、ジェバールにおいて亡命は「貴族の称号[34]」なのだという。）母から娘へ引き継がれるのは、セザレ生まれではないセザレ人であること、生まれた場から移動すること自体である。お産を手伝いにきてくれた近在の農民女性は生まれた女の子に言う。

> 「山の娘さん、あんたは急いで生まれてきたんだね、陽の光に餓えていたんだね、あんたは旅人になるだろうよ、この山から出発するノマドに、どこまで遠く行くのやら（VP 241-242）。」

作家はここで、娘の未来を予言するかのようである。だが、出発して変容をとげる存在は娘だけではないことが、本論の考察から見えてくる。むしろ、そうした存在を生み出すのは、代々の女性たちの変容そのものなのだ。その意味で、相続権なき娘は、多様で変化し続ける「母」と「母語」とを受け継ぐ相続

34　Mireille Calle-Gruber, “Ecritures fugitives, Assia Djebar entre Alger et Paris”, in X.Garnier et J.-Ph. Warren (dir.), *Ecrivains francophones en exil à Paris. Entre cosmopolitisme et marginalité,* Karthala, 2012, p.127.

人なのである。こうした条件のもとで生まれたフランス語によるエクリチュールや「他者の」言葉による自伝の問題ついては、稿を改めて論じなければならない。

使用テクスト

Assia Djebar, *Femmes d'Alger dans leur appartement,* Des femmes, 1980
———— *L'amour, la fantasia,* Jean-Claude Lattès, 1985.
（本論では 1995 年の Albin Michel 版を用いる。）
———— *Vaste est la prison,* Albin Michel, 1995.
———— "La femme en morceaux", in *Oran, langue morte,* Acte Sud, 1997.
———— *Nulle part dans la maison de mon père,* Fayard, 2007.

Malika Mokkedem, *Les hommes qui marchent,* Ramsay, 1990.
（本論では 1997 年の Grasset 版を用いる。）
———— *N'zid,* Seuil, 2001.
———— *Je dois tout à ton oubli,* Grasset, 2008.
———— *La désirante,* Grasset, 2012.

その他

Mireille Calle-Gruber, "Ecritures fugitives, Assia Djebar entre Alger et Paris", in X.Garnier et J.-Ph. Warren (dir.), *Ecrivains francophones en exil à Paris. Entre cosmopolitisme et marginalité,* Karthala, 2012.
Samira Farhoud, *Interventions autobiographiques des femmes du Maghreb, Écriture de contestation,* Peter Lang, 2013.
Giuliva Milò, *Lecture et pratique de l'Histoire dans l'œuvre d'Assia Djebar,* Peter Lang,2007.
武内旬子、「マリカ・モカデムと不穏な小説――母と娘と嬰児殺し」、『神戸外大論叢』、第 60 巻、第 2 号、2009 年 9 月。
————「砂漠の作家の海洋小説――マリカ・モカデムと「養母語」文学の可能性」、『神戸外大論叢』、第 63 巻、第 2 号、2013 年 3 月。